ファインマン統計力学 **7**章 スピン波

理学部物理学科 3 年 政岡凜太郎 2022 年 9 月 26 日

導入

本日の目標

- 磁性体の低温での振る舞いを、スピン波の概念を使って定性的に理解する.
- 1次元 Heisenberg 模型の厳密解の構成方法について知る.

Pauli 行列を

$$\sigma_i^x = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_i^y = \begin{pmatrix} 0 & -i \\ i & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_i^z = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$
 (1.1)

と定義する.ただし,この行列は $|\uparrow\rangle_i\,,|\downarrow\rangle_i$ を基底とする空間に作用するものである.また,

$$\sigma_i^{\pm} = \sigma_i^x \pm i\sigma_i^y, \quad \sigma_i^{+} = \begin{pmatrix} 0 & 2 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_i^{-} = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 2 & 0 \end{pmatrix}$$
 (1.2)

とする.

3

今回主に扱うハミルトニアンは、一般的には

$$H = \sum_{\langle i,j\rangle} J_{ij} \boldsymbol{\sigma}_i \cdot \boldsymbol{\sigma}_j \tag{1.3}$$

と書かれる.これを Heisenberg 模型という.最も簡単な例としては,1 次元で最近接相互作用のみを取り入れた場合,

$$H_{XXX} = -J \sum_{n=1}^{N} \sigma_n \cdot \sigma_{n+1}$$
 (1.4)

と書かれる.この場合も単に Heisenberg 模型と呼んだり,あるいは XXX 模型と呼んだりもする.z 軸方向の相互作用の強さを変えたものは,XXZ 模型と呼ばれ,

$$H_{XXZ} = -J \sum_{n=1}^{N} (\sigma_n^x \sigma_{n+1}^z + \sigma_n^y \sigma_{n+1}^y + \Delta \sigma_n^z \sigma_{n+1}^z)$$
 (1.5)

と書かれる.

まず、2 スピン系 $H = -J\sigma_1 \cdot \sigma_2$ を考える.

$$\Pi^{1,2} = \frac{\boldsymbol{\sigma}_1 \cdot \boldsymbol{\sigma}_2 + 1}{2} = \frac{\sigma_1^z \sigma_2^z + 1}{2} + \frac{\sigma_1^+ \sigma_2^- + \sigma_1^- \sigma_2^+}{4}$$
 (1.6)

と定義すると, $H = -J(2\Pi^{1,2} - 1)$ と書ける.ここで,

$$\Pi^{1,2} |\uparrow\uparrow\rangle = |\uparrow\uparrow\rangle, \quad \Pi^{1,2} |\downarrow\downarrow\rangle = |\downarrow\downarrow\rangle,$$

$$\Pi^{1,2} |\uparrow\downarrow\rangle = |\downarrow\uparrow\rangle, \quad \Pi^{1,2} |\downarrow\uparrow\rangle = |\uparrow\downarrow\rangle$$

となる. $\Pi^{1,2}$ はスピン 1 とスピン 2 を入れ替える変換であり,スピン置換演算子という.

ハミルトニアンは

$$H = -J \sum_{n=1}^{N} (2\Pi^{n,n+1} - 1) = -J \sum_{n=1}^{N} \sigma_n \cdot \sigma_{n+1}$$
 (1.7)

である. Heisenberg の運動方程式

$$\dot{\boldsymbol{\sigma}}_n = \frac{i}{\hbar}[H, \boldsymbol{\sigma}_n] \tag{1.8}$$

は,交換関係

$$[\sigma_1^i \sigma_2^i, \sigma_1^j] = 2i\epsilon_{ijk}\sigma_1^k \sigma_2^i = 2i(\boldsymbol{\sigma}_1 \times \boldsymbol{\sigma}_2)^j$$
(1.9)

より,

$$\hbar \dot{\boldsymbol{\sigma}}_n = 2J\boldsymbol{\sigma}_n \times (\boldsymbol{\sigma}_{n+1} + \boldsymbol{\sigma}_{n-1}) \tag{1.10}$$

と書ける.

 σ_n を大きさ 1 の古典的なベクトルとみなす. $\sigma_z \approx 1$ のとき,方程式を線形化でき,

$$\hbar \dot{\boldsymbol{\sigma}}_n = 4J \boldsymbol{\sigma}_n \times \boldsymbol{e}_z + \boldsymbol{e}_z \times (\boldsymbol{\sigma}_{n+1} + \boldsymbol{\sigma}_{n-1})$$
 (1.11)

と近似できる. $\sigma_{n+1}+\sigma_{n-1}=2\sigma_n$ と近似すると, σ_n は単に z 軸まわりのラーモア歳差運動をする.次に,

$$\sigma_n^x \approx c \sin \omega t e^{ink} \tag{1.12}$$

$$\sigma_n^y \approx c \cos \omega t e^{ink} \tag{1.13}$$

という解を仮定する.これを (1.11) に代入すると,

$$\hbar\omega = 4J(1-\cos k) \tag{1.14}$$

を得る.ここで,波数の次元について注意しておく.今回扱うのは全て格子間隔を 1 とした格子であり,波数は無次元量になる.通常の 1/(距離) の次元を持つ波数 にしたければ,格子間隔を a として, $k \to ka$ と置き換えれば良い.